

一シラ書3章・17-18、20、28-29、ヘブライ12章・18-24、ルカ14章・1、7-14—

安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。イエスは、招待を受けた客が上席を選ぶ様子に気づいて、彼らにたとえを話された。「婚宴に招待されたら、上席に着いてはならない。あなたよりも身分の高い人が招かれており、あなたやその人を招いた人が来て、『この方に席を譲ってください』と言うかもしれない。そのとき、あなたは恥をかいて末席に着くことになる。招待を受けたら、むしろ末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『さあ、もっと上席に進んでください』と言うだろう。そのときは、同席の人みんなの前で面目を施すことになる。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」また、イエスは招いてくれた人にも言われた。「昼食や夕食の会を催すときには、(中略)むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。そうすれば、その人たちはお返しができないから、あなたは幸いだ。 —ルカ14章—

## 高慢とへりくだり

信仰生活の目的は、自己の聖性と、それによって神に栄光を帰すことにあります。被造物であることをわきまえ、主人公である宇宙の創造者神に依存していると知る人の生き方は、おのずと神の偉大さを讃えているからです。

自分をひとかどの者と思わず、主人公(神)に服して、わき役に徹する人(聖マリア)の貧しさを、神がこの上なく喜ばれるのは、この人を神の心で自由に造り変えることが出来るからであり、それによって世界を創造したご自分の意図に従う人が、世界に平和をもたらし、被造物の完成を実現する人となるからです。これに反して、神を最も悲しませる生き方が「高慢」でしょう。高慢は自分の前に立ちほだかるすべてに「退け！神さえも」と、世界の中心に

自分を置いて、周りのすべては自分の幸せに奉仕する製品であるかのようになり、自分本位にふるまうて世界の主人公に君臨する暴君となるエネルギーを秘めているからです。暴君は全てを正当化して、目的遂行のためには見境なくハンマーをふるい、弱者の破壊と分裂をもたらし、いわゆる、羊を餌食にする狼に他なりません。

これらの悪すべては、「神不在」から生じるものです。自我である人間の本性自己保身と自己中心性に潜んで、その人をコントロールする悪霊の仕業と見抜いておられる主イエスは、今日の福音で、私たちの生活細部にわたって自我に注意を促しておられるのです。へりくだりは、悪霊と戦う私たち人間にとって、神が聖霊をもたらし、くださる最良の武器です！

自分の思いである自我を退け、神の言葉に従って聖霊をいただき、その実りを世にもたらされた聖母マリア様に倣い、私たちも神の前にへりくだって、聖霊を求めるとなりましょう！世界に真の回心と平和をもたらす、神に栄光を帰すために！

2022年8月28日

主任司祭 昌川信雄

